

第二十九章 亀裂

参議院選挙の与野党逆転阻止は、野党連合政権の到来を予想した論調や企図を吹きとばし、政界やマスコミの雰囲気を一変させた。衆参両院での与野党伯仲状態が変わったわけではないが、久しぶりに安定感がよみがえり、各議員は思い思いの夏休みに入った。

大福体制による党内の一本化は、有権者の間での安定志向の増大と相まって、各種の選挙に威力を発揮した。この年（昭和五十二年）に行われた二つの参議院補欠選挙と七つの知事選で自民党は完勝し、また参議院選挙と同時に施行された東京都議会選挙でも、美濃部与党の社会、共産両党が大きく後退し（合計十五議席減）、野党の自民、新自由クラブが躍進して（合計十五議席増）、保守が過半数を占め、美濃部与党は少数派に転落してしまった。この他、各地の市長選でも革新の後退がいちじるしかった。

こうして、福田首相は総裁として、また大平幹事長は次期総裁候補として、その評価を確立して行った。だが、まさにその時期に、大福体制の中心部に微妙な亀裂が走りはじめたのである。

まず、流れてきたのが「解散説」である。福田首相は参院選勝利の直後から、「総選挙は福田の手で……」と冗談めかして発言していたが、八月上旬の東南アジア歴訪を前にした大平幹事長との会談では、公然と「解散をやらせてくれないか」という希望を表明した。

しかし、大平幹事長は、福田首相の解散論に反対の意向を示した。予算委員会が逆転委員会だからと言って、最大の国事である衆議院解散を、自らの党の都合だけで断行するわけには行かない。国民の前に明らかにする名分のない解散をやれば、決して国民からの支持を得られないだろう。それに、党はいま参議院選挙で全力を使い尽くして疲れ切っているし、選挙資金も乏しい。議員は、前年末の任期切れ選挙で血を吐く思いで当選してきたものばかりである。一年もたたないのに解散とは、あまりにも非情ではないか。これが大平の言い分だった。

このときの解散要請は、党をあずかる大平幹事長の消極論によって深刻な話にはいたらず、立消えになったかに見えた。だが、この頃から、『出直しの党改革』の目玉である全党員、党友の参加による総裁公選予備選挙の実施が世間の注目を集めはじめた。秋も深まった十月末、福永健司委員長らの手によって実施細目が決まった。予備選挙の実施時期は、一年後の翌昭和五十三年十一月一日の告示、二十七日の開票となった。この選挙で二人の候補者を選び、衆参両院議員による本選挙で総裁を決定するのである。結果の予測はむずかしいが、大平は、田中派の支持が得られるので、本選挙では強味を發揮するものと見られていた。こういう情勢を反映して現職の福田総裁と大平幹事長がこの予備選挙で争うのか否か、大福体制が今後どうなるかが問題であった。福田首相は機会あることに『大福一体』、『大福水ももらさず』と大福関係の密接さを謳いあげ、このような空気をやっつきになって打ち消していた。

一方、大平幹事長も『大福が争うことはありません。大福が戦うような余裕は、今の自民党にはありません。そんなことなら大福提携はやらんですよ……』と福田首相と口調を合わせ、大福の対決を否定し続けていた。

臨時国会も終盤近くなった十一月月中旬、発足後十一月九日を経た福田内閣の改造問題が日程にのぼった。マスコミは、この改造人事についても一年後の大福関係をめぐる政局を占うという観点から注目した。

改造の焦点は、党三役と官房長官の人事であった。三役の組合せは、その政権を支える勢力バランスの象徴である。大平にしてみれば、『党は大平にまかせる』という限り、現在の大平幹事長、江崎総務会長、河本政調会長という三役は、きわめてチームワークもよく人間的にも親近感の持てる人々であり、よく機能しているので変える意志はなかった。しか

し、福田首相の周辺からは「中曽根を三役に起用したい」という意向がもたらされ、他方、官房長官については、同じ福田派内で、その就任に熱意を燃やす安倍晋太郎国対委員長と園田直官房長官が競っていると言われた。さまざま噂が乱れ飛ぶうちに、福田、大平間では臨時国会終了直後に改造断行の合意が得られ、日程の細かな打合せが進行していた。国会が終了した十一月二十五日の翌々日の二十七日に大福会談で人事をつめ、翌二十八日に一挙に改造するということが最終的に決まった。

二十七日の世田谷区野沢の福田首相私邸における福田・大平会談は、午前十時から昼食をはさんで二人だけで四時間半にわたって行われ、党、内閣の全人事が検討されたが、会談を終わって福田邸を出る大平幹事長は上機嫌であった。

会談後の記者会見のため党本部に帰る大平幹事長は、途中の車の中で同行した安田秘書に、「総理はね、僕に物すごく遠慮しているんだよ。中曽根君のことも『どうだろうか』と相談するのだ」と、人選の模様を語りはじめ、「ぼくは『中曽根君は総理と同じ選挙区の実力者ですが、その中曽根君を重要なポストに起用することは、総理の度量を示すことにもなるし、ご遠慮なさることはありません』と薦めた」と言った。

この日は、党三役（大平幹事長、中曽根総務会長、江崎政調会長）のほかに、全入閣者が内定した。翌二十八日、改造は前日の打合せを全く変更することなく、電光石火、閣僚名簿の発表が行われた。

園田は官房長官から外相に転じ、そのあとを安倍が襲った。蔵相には大平派から村山達雄、通産相には政調会長だった河本敏夫、経企庁長官には宮沢喜一が起用された。また翌年一月の定期党大会で船田中を副総裁に選任することが内定した。

この組閣についての大平の考えは、福田首相が二期二年で終わるならば、こんどの改造は内閣最後の人事となる。大福体制を尊重する建前から、人選はなるべく福田首相の意向を尊重したい、というものであった。

だが、マスコミの多くは、人選で福田首相がポイントを挙げたとか、大平幹事長がどのように抵抗したかといった大福対立の図式の中でしかこの人事を解釈しなかった。中曽根の三役起用（総務会長）については、大平の党独占体制に楔を

打ち込んだ、という解釈で報道され、これが流布されることによって、やがて福田・中曾根の上州連合説が浮上するきつかけともなった。

この頃、大平幹事長は、「事実と違っていても、マスコミで報道されることによって、それは事実として独り歩きしはじめ。そういう意味では、歴史的事実とは、現実と報道との間に形成されているものだ」という感想をもらし、内閣改造の真相として、「この内閣の最大の前提は、大福体制の確認であった。マスコミは、この点を忘れている……。」と不満を表明している。だが、大平がその真意を伝えるとしたら、「大福覚書」の存在を明らかにしなくてはならず、したがって、報道の誤りを訂正するすべはなかった。

この大福対立の図式は、ひとたび表面化すると、実際の福田、大平の関係から離れて独り歩きしはじめ、それぞれの派閥もこれに影響され、一年後の総裁公選をにらんで対立意識を助長することとなった。昭和五十一年十月末の大福提携の合意を知らないものにとつて、福田派が現職総裁の再選を目指し、大平派が大平の総裁就任、念願の大平政権誕生を望むことは当然に見えた。

いずれにしても、この改造を境に大福体制は満一年の折返し点を迎えて、対立関係を含む協力関係となり、緊密な協力に隙間風が入りこむ空間をひろげて行つた。一年後に予定された総裁公選予備選問題が各派内部で公式、非公式に論議されはじめたのは、この頃からである。予備選が行われるかどうか半信半疑であった党内でも、改造が終わり、十二月に入ると、予備選の投票権を持つ党員の入党期限が間近に迫り、各派ともに他派の動きを横目で見ながら何となく落ちつかない空気が流れ出していった。この予備選の投票権は、最低、五十二年と五十三年の二年間、連続して党費を払つた党員と、五十三年度の会費を払つた党友とに与えられる規定であり、そして五十二年度の党員の入党締切り期限は五十三年一月末だったのである。

この頃、竹下登委員長を中心にした全国組織委員会は、「貴方も総裁が選べます」というキャッチフレーズのもとに、

百万党员獲得を目指してフル活動をしていた。これまでの自民党党员が四十万名程度であるから、一挙に二倍以上にしようというのである。党内の多くはこのPRを誇大宣伝と受け止め、せいぜい五十万から六十万名くらい獲得できれば上々としていたが、年末になると各派の動きは極度に緊迫したものになってきた。

大平派では、先の改造で鈴木善幸農相がその職を離れ、閣務に専念することになった。鈴木は、「大福覚書」の立会人の一人としてその間のいきさつは熟知しており、またこれまでに政治抗争の舞台を何度も潜ってきた老練な政治家であった。理想家八々の大平をカバーするのもってこいの人材であり、鈴木が閣務を統括することは、総裁公選に臨むうえで、大平派にとって理想的な配置であった。

こういう情勢を反映して、各紙は動き出した予備選をめぐって、「話合いか激突か」と、政治企画を連日のように紙面に載せるようになった。さらに、中曽根総務会長、河本通産相が出馬の動きを見せはじめたことも、マスコミの関心をそりたて、党内には、動意が日増しに色濃くなって行った。

それに伴って、予備選に投票権を持つ党员獲得の動きも活発になりはじめた。昭和五十三年一月十四日現在の党员数は四十七万九千七十九名であったが、入党締切り期日は二月末まで延期され、竹下組織委員長によると、「最終的には百万党员も夢ではない」という状況となった。

一月末から二月に入る頃になると、各地方県連から連日、二万、三万という大量入党の申込みが党本部に届けられ、二月末日締め切られた党员党友の数は、党员が百三十三万一千人、党友が十八万一千人、投票権を持つ国民政治協会員が四千八百人で、合計約百五十一万七千人に達した。一カ月間に百万人近い党员が入党したのである。もうこうなると、その派閥別分類、浮動票の数など、その内容を正確に知るものは誰もなく、単に派閥に系列化されていることが明らかな党员党友数だけで優劣を断るわけには行かなくなってしまった。

他方、この時期、日本の経済は依然として低迷状態を続けていた。石油価格の高騰に対応して民間経済は減量経営に全力をあげており、景気は好転を見せず、企業の倒産件数も高く、失業も増加傾向を示していた。福田内閣は、世界経済の

停滞を打開するため、わが国が世界経済の三つの「機関車」の一つとしての責任を果たすため前年（昭和五十二年）三月の日米会談で「七％の経済成長を行う」と表明していたが、この数字は五十三年度の予算編成時に当然問題となり、その達成が可能かどうかについて政府内でも議論が出はじめていた。

大平幹事長は、一月十八日、都内のホテルで開かれた日本経営者連盟の会合における講演でこの点を問題とし、「七％成長をやると政府が明言したから先の日米交渉がまとまったのであり、約束は守らなければならない」と強調した。「七％はあくまで努力目標を示したまでだ」とする福田首相に対して、「政府対政府で交わした約束は公約であり、どんなことをしても守らねばならない」という考えを示したのである。新聞は、早速これらを取りあげて、「七％達成できない場合の福田首相と政府の責任について間接的な形で言及したものと見られる」と報道した。確かに、このときの七％問題の追及は、いつもの大平に似ず頑強であつて、福田側は「大平が政権ゆさぶりのための伏線を張りはじめた」と受け止めたようである。大福間の亀裂はここでも生じはじめた。後に大平は知人にこのことについて、「緊張関係の高まるいまの国際社会で、せめて国際間で約束したことだけは必ず守り通したい。そうすれば少なくとも国際社会の破局だけは避けられるかもしれない」という感想を述べている。大平の信念は「出来もしない約束は軽々にしてはならない。しかし、一度約束したら、それはどんなに苦しくとも守らなければならない」というものであつた。

二月十八日、大平幹事長は自民党香川県連臨時大会に出席するため故郷へ帰つた。大平を迎える大会は熱気にあふれており、高松中央支部、高瀬支部などから「大平総裁の実現を望む決議文採択」の動議が出されて、満場一致で決議された。「大平総裁」を望む香川県連の党員獲得運動は、この頃目標を大幅に上回り、三万七千人を超えるほどになっていた。

大平はこの席上で「総裁公選は党の命運をかけた大事業である。秩序正しく、公明、清潔に行わなければならない。だが総裁の座につくかというより、公正に行われることが大切である。幹事長として、このため全力投球している」とあいさつしたあと、自分の去就については、「時期がきた段階で、党のため、天下のために判断して自ら天に問うて去就を決

めたい」と述べた。この時の報道の中に、「大平氏、意欲を示す」というものもあったが、多くは「迷惑顔の大平氏」という印象を見出しにしていた。

福田首相周辺からは、折にふれて「解散説」が流され、大平派内は秋の総裁公選を目指す動きが高まり、大福関係は蜜月の甘さ一辺倒ではなくなっていた。だが、党内や世論の日増しにエスカレートする大福対決ムードに比べ、福田首相、大平幹事長の対応は全く煮え切らないものと受けとられていた。一方、党内には、文字どおり大福は争うべきではないという意見も出はじめ、奇妙な情勢が続いた。

二月二十日頃から、伯仲国会の年中行事化した予算の修正劇が日程にのぼってきた。大平幹事長は二月十九日午前、党本部の青年部婦人部全国大会において予算修正に言及し、「野党側の要求する所得税減税も含めて、整合性がある限り、現実的に対応する」という柔軟姿勢を示唆した。この姿勢に大蔵省は強く反発すると同時に、首相周辺にも、予算の安易な修正には反対であるという空気が出はじめた。この党内の修正反対論の舞台は、中曽根総務会長が主宰する総務会の場であった。福田派、中曽根派などの委員たちが口を揃えて、折衝に当る大平執行部の動きを撃つ空気が大勢をリードしていた。また二年生、一年生議員を中心に五十六名が予算修正反対の署名をしていた。

三原朝雄国対委員長には「国対は、修正問題について交渉するだけで、その内容については総務会が判断し、決定すべきだ」という総務会主導の制約が課せられた。「修正の具体的内容を示せ」と言う野党と、強硬な総務会の板バサミとなつて三原はしばしば対応に窮したことがあった。大平は三原に「君に連日苦勞をかけるのう。しかし、君一人にだけ責任を負わせるようなことはしない。ぼくも一緒に打闘に当るから頑張ってくれ……」という趣旨の電話をかけて慰めたが、のちに三原は「あの電話は生涯忘れられないほど有難かった」と語っている。

二十四日は午後七時二十分から、与野党幹事長書記(局)長会談が開かれた。いよいよ結めの段階である。大平幹事長は「ボクがこれから正確な日本語で説明するから間違えないで聞いてくれ」と前置きして、予算修正に対する自民党側の考え方を各党に説明した。この会談の後、記者会見に現れた三原は、「はじめ、大平幹事長は何を話し出すのかよくわから

なかった。ところが、じつと聞いていると、濃い霧の中に、おぼろげながら三本の木のようなものが見えてきた。それを聞いていては「これで助かった」とホッとしたり……」と感想を述べた。

その大平提案は、総合すると、政府原案は与野党で一致した分だけを修正する、野党側の要求する減税や福祉の増額といった修正要求はその内容に関係委員会の話し合いで詰める、その結論を秋の臨時国会で補正予算を審議するときに実現する、というものであった。大平はこれを「君たちは二階にあげれというが、いまは二階にあげられない。さればと云って、君たちの要求は委員会で詰めた上で、後で実行するのだから、全く上にあげられないというのではない。したがって、厳密に言えば一階でもないし、二階でもない、中二階、である」と説明したと言われる。野党内にも大平幹事長の苦心を了とするものが多く、大平提案は原則的に諒承された。

翌二十五日の臨時総務会では、「三役は予算原案の基本的性格を堅持し、予算編成の重点主張を逸脱しないように心得て行つ」という条件つきながら、三役一任が決まり、修正劇は事実上山を越えた。

この予算問題が表面化する前、安倍官房長官ら政府首脳から、「どうせじり貧なんだから、予算が修正されるようなら解散だ……」という強硬な発言が飛び出したりしていた。野党への牽制もあるうが、解散を待望する福田側の願望がにじみ出ている発言でもあった。

この結果、三月七日夜、五十三年度予算は、年度内成立ギリギリのタイミングで衆議院を通過した。大平は「山上在山幾層」だとしながらも、安堵の吐息をもらした。その五日後の三月十二日、大平は満六十八歳の誕生日を迎えた。

日中平和友好条約の締結も、大福のせめぎ合いの材料となった。中国側が乗り気であることが確認され、機は十分に熟していたにもかかわらず、福田首相は、日中平和友好条約の締結に慎重な態度をとり、党内の日中促進派の不満をつのらせた。日中問題は、再び党内の対立の火種になりはじめていた。

この頃の福田首相の心境について、マスコミは二つの見方をしていた。一つは、日中条約調印によって一挙に人気を高

め、解散または総裁選への切札にしようとする政治的企図のもとに、タイミングをはかっているというものであり、もう一つは、日中をもって福田内閣の課題とするという大福体制発足当初からの了解があったとする日中花道論である。いずれにしても、慎重な福田首相の態度を攻撃するかのようになり、四月十三日、百隻にのぼる中国漁船団が尖閣列島周辺に突如出現し、日本の「領海」に入ってきた。この事件は日本の世論を刺激し、「領海侵犯だ、けしからん」とするタカ派と、「福田首相の指導力がないからこうした事態を招く」といったハト派の対立がさらに尖鋭化した。

また、三月二十六日に発生した過激派による成田空港管制塔乱入事件も、「話し合い解決」を主張するハト派路線と「治安特別立法」を主張するタカ派路線との対立を生み出し、総務会で論争が繰り返された。

この間、京都では二十八年にわたって府政を独占した嵯川虎三知事の引退に伴う知事選挙で府政を革新から奪回するため、自民党は参議院議員の林田悠紀夫（大平派）を立てることにした。大平は、当初、貴重な参議院の議席を減らすことをしづつたが、京都出身の前尾繁三郎の懇請もあって、林田候補が実現した。大平、前尾らをはじめとする必死の努力で林田は勝利を手中にし、前年から見られた革新自治体の後退をさらに大きく促進した。この勝利には、福田周辺も「大平幹事長の選挙戦の強さにはホトホト感心している」という感想を示したが、大平は十日の記者会見で、「いままで失っていた地位をかううじて回復しただけで、自民党に（勝利を）誇示する力はない」と述べ、地方選勝利をテコにした解散論に強く反発した。

こうして予算成立後の四月中旬から下旬にかけて、さまざまな事件を織り込みながら、大福関係は微妙に揺れ動いていたが、中曽根総務会長の動きがこれにもう一つの要素をつけ加えた。中曽根は、ハト派の代表たる大平に対立するものとして、ことさらタカ派的主張を強調する戦略をとったが、それは、同じタカ派的体質の福田とはあい通じ、そこから、いわゆる上州連合の構想が色濃くにじみ出てきた。これに対して大平には個人的に近い河本との間に接近が見られ、その結果「福中对大河」という二極分化の傾向も隠顕しはじめる。

こうした動きにのって、福田首相が会期末解散を強行しようとするれば、その決断は五月初めの日米首脳会談前後に下さ

なければならぬ。大平幹事長と決裂してでも解散を断行するか、大福覚書精神を守り、話し合いを行うことに賭けるか。四月三十日、福田首相は、この重たい政治的決断を背負ったまま訪米の途につく。その帰途、立ち寄ったハワイのマウイ島で、五月五日（日本時間六日）同行の記者団と政局懇談を行ったが、その発言内容は、党内、とりわけ大平陣営に少なからぬ波紋を起すことになった。

福田首相は、「私も大平幹事長も二人が相争わないということが日本の政治にとって最大の課題だ、という点で一致している。総裁選にどう臨むかは暮になって考えればいいことだ。その時になれば、大福が話し合つて対処することになるだろう」と、話し合い一本化を示唆し、さらに解散については、「いまこの時点で私の頭の中に解散の『カ』の字も無い」としながらも、「八月以降は（補正予算で）臨時国会があるかもしれないが、決まった日程はない」と秋口解散があるかもしれないと受け取られるような発言を行った。

各紙は一齐に「大福争わず、首相再選に意欲」、「今秋解散示唆」などの大見出しを掲げ、大々的にこれを報道した。この福田発言を受けて、六日夜、都内のホテルで幹事長番記者と懇談した大平は直ちに反応を示し、「総裁公選の舞台はすでに回っている。党改革の柱である公選は必ずやらなければならないし、準備を進めていかねばならない。そのことと誰が（総裁選に）出るといふことは別問題なのだ」と語った。

福田首相のハワイ発言は、それまで「解散阻止、総裁公選あくまで実施」と「大福体制の維持」という和戦両様の両面作戦をとっていた大平派に、「公選に大平出馬」という旗印を鮮明化させ、表舞台での公選対策に乗り出させる契機となつた。五月十日、同派幹部と大平派の若手議員の勉強会である「水曜会」とが合同会議を開き、公選に大平擁立を決議した。「福田首相の任期中は福田氏を支えるが、党大会の決議に沿つて総裁公選を実施するのが国民に應える道である」という主張である。さらに解散問題についても、「長期不況が続く経済情勢の中で、解散よりやることは他にある。行政府と立法府の対立はない。そんなときに行政府が解散という鉄槌を立法府に下すことは必要ないし、すべきでない」と解散反対をズバリ掲げた。

五月二十五日、帝国ホテルで行われた内外情勢調査会における大平の講演がマスコミから「総裁公選への事実上の出馬表明」と受け取られ、党内が騒然としたのを機に、福田首相は大平幹事長と話し合い、二十七日、遊説先の名古屋市内のホテルで、「公選問題は秋まで凍結し、当面政局の運営に全力をあげ、総裁公選は必ず実施する」との談話を発表した。この場に同席した大平も「同感」の意を表し、ここにいわゆる「大福政治休戦」が成立した。このあと大平は「立候補表明を潰け物にしておこうということだよ」と語った。

福田首相は大福体制の堅持を選択したが、福田周辺から吹き出す解散風はますます強く、願望や国会対策上の思惑の域を超え、切実な色合いを帯びたものになっていた。たまりかねた議員たちは、六月上旬、田中派の金丸信らが中心となつて、「名分なき解散には反対」という署名運動をはじめたが、この運動は燎原の火の如く広がつて、放置しておいたら衆議院議員の七、八割にも達する勢いがあった。六月十六日の会期が終わつたら安心して夏の日程が取れるのか、それとも秋の解散に備えて選挙運動をしなければならないのか、解散の有無は議員にとって一大事である。大平幹事長のもとには、連日、多くの議員から「何とかしてくれ」という陳情や要請がよせられた。

この頃の大平は、払えども払えども福田周辺から流れて来る解散風を否定する毎日を送っていた。福田首相が機会をとらえ、大平を説得して解散に持ち込むか、大平幹事長が危険なワナを乗り切つて福田による解散を封じ切るか、秋の総裁公選をにらみながら、大福の水面下のせめぎ合いが続いた。

解散反対の署名運動が反福田運動に転化しかねない党内情勢に最も驚いたのは、首相周辺であり、大福の話合いによる一本化を期待して、慎重にならざるをえなくなった。

第八十四通常国会は、六月十六日、会期延長を含め百八十日の会期を終えた。この日昼、国会内で開かれた党代議士会の席上、大平幹事長はいさつに立ち、「解散権をもつ内閣の首班自身（福田総理）が当面解散を考えてもいないし、その余裕もないと表明している。党はその表明を信頼し、内閣と一体になつて政局の安定を図り、政策の推進にあたること

その責務である」と、解散問題に絞って議員に語りかけ、「(今後の課題は)政府と党が一体となって政治の運営に当り、政局の不安を招来することのないよう努力することである。党は、政府が経済の回復と外交案件の処理に周到かつ果敢な措置を講ずるのを助けつつ、党改革の基本精神に基づき、秋に予定された総裁公選を立派にやりとげなければならぬ。自信と平常心をもって党勢の拡大と政策の研鑽に精進されんことを希望する……」と述べた。

この『平常心』という表現こそ、解散のないことを明確に保証した党内へのサインであり、集まった議員の間から安堵の声があがった。このあと大平幹事長は、国会終了に伴うあいさつのため議長公邸に保利衆議院議長を訪ねたが、議長は大平にむかって、「君は、幹事長として総理を助け、全く間然するところがない。敬服しました」と激賞したという。

この政治休戦の頃から、大福会談はさらに一層頻繁に行われるようになり、その内容も次第に核心に迫るものになって行く。福田首相の心の中には、秋まで三カ月、この夏の時点で大平と何とか合意を取りつけないという思いが高まっていたのである。事実、この間に話し合いがつかなければ、見通しの立たない強引な解散に突っ込むか、政局の混迷を覚悟で公選で大平と争うか、それとも政権の座を下りるのが、いずれにしても苦しい決断をせざるをえなくなっていた。

政治休戦に合意した福田、大平両者の胸中は複雑であった。党内は二人の心中をよそに秋の政局に向けて大きく動きはじめている。しかも福田陣営では『福田再選』をねらい、大平陣営では『大平擁立』を決意し、話し合いは話し合いとして、総裁公選の準備を整える態勢をつくっていた。

この頃、大平は記者団に、「秋祭りのあることは事実だ。しかしいまから野良着のまま踊りの舞台上に上がるわけにはいかない」と語り、福田側の『解散による総裁公選の事実上の棚上げ作戦』を阻止するためには、秋までの三カ月間、自らの手足を縛ることになることを承知で、この政治休戦を受けとめたことを示した。

二人とも秋の公選という同じゴールを目指していても、思惑は違つた。しかし、党内を二分する勢力が真向から対決したのでは、どちらが勝つてもその後の政権は半身不随となり、政権の維持が困難になってしまう。こうして政治休戦中も話し合いはつづき、なお一層濃密なものになって行つた。

大平は政治休戦期間中、福田が信義を重んじて立候補を辞退することを前提とした形で、秋の総裁公選を考えていた。大平は総裁公選に臨む立候補の所信を自ら筆を取って書き上げたが、それは公選を闘う決意を示したのではなく、「公選の意義」と「立候補に至る自分の立場」のみが記されていた。

福田の方は立候補が辞退か、その心境は揺れていたと思われる。この頃、福田首相は大平幹事長との会談で、「来年のサミットは君にやってもらう」とも、「総裁公選にはぼくが推薦人になる」とも言って、二年の任期で大平と交代する発言をしているが、その後、「何らかの方法はないか、君考えてくれないか」とも少し任期に含みを持たせてほしいという意図を明らかにしている。また、福田は「ぼくが総選挙をやり、政局を安定して君に渡したい」ともしばしば繰り返した。

七月二十二日、大平幹事長は自民党香川県連大会出席のため讃岐入りし、支持者を前にして、「この秋の総裁公選を厳正に秩序正しくやり遂げることが公党の名誉だ。私も問題になっている人物の一人として感慨を覚える。したがって、時期が来たら天下に公人としての決意を表明して皆さんの判断を仰ぎたい。……私は讃岐に生まれ、讃岐に育ち、讃岐に死ななければならないと思っている。私の栄辱は一切讃岐の皆さんと一緒にあるつもりだ」とあいさつした。

一方、福田首相は、張香山中日友好協会副会長の園田外相に対する訪中要請にこたえ、八月六日、日中平和友好条約締結のために園田外相を訪中させる決断をした。秋をにらみ、計りすましたタイミングである。八月十二日、日中平和友好条約は予定の如く調印され、その夜、総理官邸の一階喫煙室にセットされたテレビの前に坐った福田首相は笑顔を見せていたが、同席することを求められた大平幹事長はただ黙って福田首相を見つめていた。日韓大陸棚、成田空港開港、日中平和友好条約調印と、福田内閣の懸案はつぎつぎと解決された。

とくに日中平和友好条約の調印は与野党大部分の人に歓迎され、国民の多くにも好意的に受け止められた。もしこれが福田再選への政治的な戦略であったとするなら、その企図は見事の中したと言えるだろう。マスコミは、「首相は再選に自信」と報じ、福田派内も国民的な反応のよさに沸き立っていた。政権発足以来、一度も三〇%台を記録したことがな

く、前年末には二一%強と岸内閣以来の低い記録を示した福田政権の支持率が、この時を境に上昇に転じた。

八月二十二日、自民党の夏季研修会が箱根で開催されたが、そのレセプションで福田総裁、大平幹事長、中曽根総務会長、江崎政調会長等は、司会者安西愛子参議院議員の巧みな誘導でマイクを握らされ、歌を歌わされた。即席の座興ではあるが、それぞれの派閥に属する研修生の前での歌合戦は、予備選挙の前哨戦のように受け止められた。大平は「北帰行」を歌ったが、同行した幹事長番の記者たちから「歌つのはよいが北帰行とは選曲が悪すぎる」とひやかされた。

こうして八月末、五十三年度党費納入が締め切られ、総裁公選予備選の投票権者は、黨員、党友会わせて百五十余万人と確定した。

この頃、大平は頻繁に行われる大福会談について、「ぼくと福田さんとはこんなに何度も話し合ったが、そのたびに福田さんが繰り返したのは、『解散をやらしてくれないか』ということと、『総裁公選をやったら大変なことになる。なんとかならないか』ということだった」と回想している。「解散」と「総裁公選」という相容れないモチーフをめぐっての綱引きは、大福一体という信頼関係の上に成り立った合意の間の亀裂を深めるだけだったが、「二年後のことは二年たったらまたその時に話しましょう」と大福提携合意の際に語った「その時」はあと二カ月に迫っていた。